

宮城県特別支援教育将来構想実施計画（後期）の取組状況について

主な取組	県立特別支援学校の在り方検証（優先課題2）
事業名	28（非予算事業）
担当課	特別支援教育課
事業内容	○視覚支援学校への幼稚部設置 ○聴覚支援学校の学科再編の検討 ○通学区の再編、各県立特別支援学校の在り方を検討
取組方針・達成目標	○視覚支援学校の幼稚部は校舎の改築時に合わせた設置を目指す。 ○聴覚支援学校高等部への普通科設置及び専攻科の学科再編について、令和4年度までに検討する。 ○県立特別支援学校の児童生徒数の推移や障害等の状況の変化、社会動向等を踏まえながら令和2年度中に通学区の再編と各学校の在り方を検討する。
令和3年度事業概要	○視覚支援学校の幼稚部は、視覚に障害のある幼児が1日も早く専門的な教育的支援を受けることが出来るよう新校舎の供用開始を待たずに設置準備を進め、令和4年4月に開設した。 ○聴覚支援学校の学科再編は、高等部普通科の新設と専門学科を工業科系と家庭科系の2科の学校案が示され、教育委員会として承認した。 ○第1回特別支援教育将来構想審議会において、通学区案を提示し意見聴取した上で通学区案の公表を行った。

視察事業名	県立特別支援学校の在り方検証【利府支援学校】	視察実施日	令和4年7月15日、令和4年7月19日
評価ポイント	<p>(1) 狭隘化の現状について (2) その他</p>		
意見・感想	<p>(1) 狭隘化の現状について ○県立特別支援学校の狭隘化は、本構想の策定段階からの議論であり、その改善が最重要課題と位置付けた経緯があり、今回、現状の困難を再確認した。 ○2017年にも視察したが、当時と同様の狭隘化と、さらに経年的な劣化など、十分とは言い難い施設設備の現状強く意識した。 ○本構想審議会として、さらなる取り組みを県教育委員会に求める必要があることを再確認した。 ○本校については、特別教室の転用やプレハブ校舎設置等で教室不足を補っているが安全面や衛生面でも問題があると思われる。 ○2つの分校設置によって、本校の在籍生徒数は幾分減らせたが、本校の施設設備等に改善は図られていないように感じた。 ○体育館が狭く、校庭には仮設校舎が建てられ、更には簡易プールで活動している現状であることから十分に運動できる環境ではない。 ○送迎用の通学バスや放課後デイサービスの状況から見て、校門から昇降口までのアクセスや駐車場の狭さが大きな課題である。 ○先生方の丁寧な対応と近隣住民やバス運行会社の配慮によって、スムーズに進められているものの、人的な対応には限界があり、事故が発生しないような施設拡充が必要と感じた。 ○小高い丘の上にあるため校地面積に限りがあり、これ以上の施設を拡充していくことは困難であるため、今後計画的な対策を練ることが重要と感じた。 ○元々あった校庭にプレハブ校舎を建てているため、校庭の狭さに驚いた。体育館も現在の人数で設定していないため、割り当てに苦労している様子であった。 ○先生方が手作りの遊び道具を作成し、創意工夫の授業を行われていると感じたが、物を置くスペースがない状況。 ○地元の学校の環境が整い通学できれば、子供の負担も少なく、周りの障害への理解が進みインクルーシブ教育が進むのではないかと。</p> <p>(2) その他 ○コロナ禍のため、対人的な距離を以前以上に確保することが求められる中で、学習活動と対人距離の確保といった両立し難い状況を先生方の工夫により、乗り越えようとしている現状には頭が下がる思いであるが、狭隘化という本質的な課題の改善以外に解消し得ないという点を再確認する必要がある。 ○医療的ケアの対象児童生徒とそれ以外の児童生徒が同じ教室等で学習に参加している。対象児童生徒を一定の人数集め対応する方が、管理的には容易であるが、あえて学年等を基準にクラス・学習グループを編成し、児童生徒の多様な障害の状況を踏まえつつ一緒に学習することは支援学校内のインクルーシブな対応であると評価できる。 ○校舎の傷みも目立ってきている。狭い敷地では、これ以上の増築は困難であり、関係市町との連携も大事にしながら新しい土地を求めることも必要な気がする。 ○分校に小・中学部の児童生徒が在籍している角田支援学校白石校と同様の形態の分校を増やすことも考慮してはどうかと思う。また、高等部についても、高等学校の空き教室等の活用も考えられる。 ○児童数増を富谷校と塩釜校で対応している現状であるが、今後も児童数増が想定され、両校においても教室等を拡充していかなければならない状況である。 ○人的な力で解決していくには限界があり、教育関係者だけでなく、行政関係等の方々にも現状を理解してもらい、仙台圏内の支援学校の施設整備に尽力していただければと思う。</p>		